平成５年度赤潮貝毒監視事業（貝毒調査：抄録）

酒井基介・吉田正雄・湯浅明彦

本事業は,特定有毒プランクトンに起因する二枚貝類の毒化実態を把握し,貝類の食品としての安全性を確保するとともに,漁業等への被害の軽減と未然防止を図ることを目的として,昭和 55 年度から継続実施中の事業である。

平成５年度における鳴門市「内の海」,小松島市「小松島湾」,阿南市「橘湾・椿泊湾」での毒化原因プランクトンの出現動向と環境および麻痺性・下痢性貝毒によるアサリの毒化実態について取りまとめたので報告する。なお,詳細については,「平成５年度赤潮貝毒監視事業報告書（貝毒調査)」を参照されたい。

1.　麻痺性貝毒原因プランクトン

Alexandrium tamarense：４月および 2～3 月に出現し,最高出現数は,内の海で 55,250cells／ℓ検出された。出現水温は 6.7～15.1℃,塩分は 15.6～32.7 であった。

A. catenlla：5～7 月に出現し,最高出現数は,橘湾で 69,250cells／ℓ検出された。出現水温は 16.7～24.1℃,塩分は 15.1～32.5 であった。

2.　下痢性貝毒原因プランクトン

Dinophysis fortii：4～7 月および 2～3 月に出現し,最高出現数は,内の海で 30cells／ℓと少なかった。出現水温は 9.4～21.7℃,塩分は 26.3～32.5 であった。

D. acuminata:4 月,6～7 月および 2～3 月に出現し,最高出現数は,椿泊湾で 450cells／ℓ検出された。出現水温は 10.6～24.1℃,塩分は 25.2～32.5 であった。

3.　二枚貝の毒化実態

アサリの可食部における麻痺性貝毒は,6 月に「橘湾」,3 月に「内の海」と「椿泊湾」から検出されたが,全て規制値以下であった。

一方,下痢性貝毒は全く検出されなかった。